

【担当箇所】『浄土論註』巻下 解義分 「善巧撰化章」（ぜんぎようせつけ）

『真宗聖教全書』三三八頁十一行〜三四〇頁六行目まで）

* 天親菩薩の『浄土論』の「長行」（じようごう）を曇鸞大師が解説されたものが巻下であり、「善巧撰化」とは「菩薩の巧みな手だてによる衆生救済」について書かれている。

一・本文

（省略）『真宗聖教全書』三三八頁十一行〜三四〇頁六行目まで

二・書き下し文

善巧攝化は、

是の如く菩薩、奢摩他と毗婆舍那、廣略に修行して、柔軟心を成就すと。

「柔軟心」と、謂く廣略の止觀相順し修行して不二の心を成ぜるなり。譬ば水を以て影を取るに清と靜と相ひ資けて成就するが如きなり。實の如く廣略の諸法を知ると。

「如實知」といふは實相の如くして知るなり。廣の中の廿九句、略の中の一句、實相に非ざること莫きなり。是の如く巧方便廻向を成就す。

「如是」は前後の廣略皆實相なるが如くなり。實相を知るを以ての故に則ち三界の衆生の虚妄の相を知るなり。衆生の虚妄なるを知る則ち眞實の慈悲を生ずるなり。眞實の法身を知れば則ち眞實の歸依を起すなり。慈悲と歸依との巧方便は下に在り。

何者か菩薩の巧方便廻向と。菩薩の巧方便廻向といふは、謂はく説禮拜等の五種の修行をして、集むる所の一切の功德善根をして、自身の住持の樂を求めず、一切衆生の苦を抜かむと欲ふが故に、一切衆生を攝取して共に同じく彼の安樂佛國に生と作願せり。是を菩薩の巧方便廻向成就と名くと。

王舍城所説の『无量壽經』を案ずるに、三輩生の中に行に優劣有りと雖も、皆无上菩提の心を發さざるは莫し。此の无上菩提心といふは、即是願作佛心なり。願作佛心は即是度衆生心なり。度衆生心は即是衆生を攝取して有佛の國土に生ぜしむる心なり。是の故に彼の安樂淨土に生と願ずるは、要ず无上菩提心を發するなり。若し人无上菩提心を發さずして、但彼の國土の樂を受こと間无きを聞て、樂の爲の故に生を願ずるは亦當に往生を得ざるべき。是の故に「自身住持の樂を求めず一切衆生の苦を抜かむと欲

ふ」と言うが故にと。「住持樂」といふは、謂く彼の安樂淨土は、阿彌陀如來の本願力の爲に住持せられて受樂間无き。

凡そ廻向の名義を釋せば、謂く己れが所集の一切の功德を以て一切衆生に施與して共に佛道に向むるなり。「巧方便」は、謂く菩薩願ずらく、己れが智慧の火を以て一切衆生の煩惱の草木を焼かむ。若し一衆生として佛に成らざること有らば、我佛に作さじと。而に彼の衆生未だ盡ず、成佛せば菩薩已に自らも成佛せ、譬ば火燵 聽念反して一切の草木を摘聽歴反みて焼て盡さしめむと欲ふに、草木未だ盡きざるに火燵已に盡きむが如し、其の身を後にして身を先とするを以ての故に巧方便と名く。此の中に方便と言ふは、謂く一切衆生を攝取して共に同じく彼の安樂佛國に生ぜむと作願す、彼の佛國は即是畢竟成佛の道路、无上の方便なり。

聖教電子化研究会 (seiten@icho.gr.jp)

サーバ提供：真宗大谷派大阪教区「銀杏通信」より

(* 『解説浄土論註』改訂版―東本願寺出版127ページ参考)

三：現代語訳

善巧摂化とは、

是くの如く菩薩は奢摩他・毘婆舍那にて広略修行して柔軟心を成就す。

「柔軟心」というのは、三嚴の広を觀じ、一法句の略を觀ずるについて、止と觀とが相応して、所觀の境徳すなわち実相と、能觀の心とが、境智不二となったのをいうのである。たとえば、水をもつてものの影をうつす場合に、水の清らかさと静けさとが、あいよつて成就するようなものである。

実の如くに広略の諸法を知る。

「如実に知る」というのは、実相にかなって知ることである。広げている三嚴二十九種も、略している一法句も、すべて実相でないものはない。

是くの如くにして巧方便回向を成就す。

「是くの如く」というのは、前の三嚴の広も、後に出した一法句の略も、みな実相である、その所觀の実相と能觀の心とが不二になることである。実相に達するから、三界の衆生の実相にそむくすがたを知る。衆生の実相にそむくすがたを知るものだから、これを救おうという真実の慈悲をおこす。真実の法身すなわち実相を知るものだから、菩提を求めようとする真実の帰依をおこすのである。その慈悲と帰依と巧方便とは下に示されてある。

何者か菩薩の巧方便回向なる。菩薩の巧方便回向とは、謂わく(とききに) 説ける礼拝等の五種の修行をして集むる所の一切の功德善根をもつて、自身の住持の樂を求めず、一切衆生の苦を抜かんと欲うが故なり。一切衆生を摂取して、共に同じく彼の安樂仏國

に生ぜん」と作願するなり。是れを菩薩の巧方便回向成就と名づく。

王舎城において説かれた無量寿經のうえを考えると、往生を願う上・中・下の三類の人の中で、その修行には優劣があるけれども、いずれもみな、無上菩提心すなわち他力の信心をおこさないものはない。この無上の大信心は自分が仏になろうと願う心であり、この自分が仏になろうと願う心は、そのまま衆生を済度しようとする心である。衆生を済度しようとする心とは、衆生を摂めて仏のまします浄土に生まれさせる心である。こういうわけであるから、かの安樂浄土の往生を願う人は、かならず無上菩提心すなわち信心をおこさねばならぬ。もし人が、この信心をおこさずに、ただかの浄土の樂しみを受けることが絶えまのないということ聞いて、樂しみを貪るために往生を願うような者は、また往生はできぬのである。そこで、「自身の住持の樂を求めず、一切衆生の苦を抜かんと欲うが故なり」といわれたのである。「住持の樂」とは、かの安樂浄土は阿弥陀如来の本願力によつてたもたれて、樂しみを受けることが絶えまがないということである。

およそ、「回向」ということばの意味を解釈するならば、菩薩が自身で集めたところのあらゆる功德を他のすべての衆生に施して、みなともに仏果に向かわせることである。

「巧方便」というのは、菩薩が自分の智慧の火をもつて一切衆生の煩惱の草木を焼こうとして、もし一人の衆生でも成仏しなかつたならば、自分は仏になるまいと願う。ところが、衆生のすべてがまだ成仏しないのに、菩薩はさきみずから成仏することである。たとえば木の火ばしをもつて、草木を摘んで焼き尽くそうとするのに、その草木がまだ焼けきらないうちに、火ばしがさきに焼けるようなものである。自分の身を後にして、しかもその身が他の衆生よりもさきに成仏するから巧方便と名づける。

いまここに方便というのは、すべての衆生を摂めとつて、ともどもに弥陀の浄土に生まれようと願うことである。それはかの仏国はすなわち、ついに仏になるところの道であり、最もすぐれた方法だからである。

(<http://www.yamadera.info/seiten/d/ronchu2.j.htm> より)

(* 『解説浄土論註』改訂版―東本願寺出版128ページ参照)

四・検討

(1) 善巧ニ巧みに善くてだて(方便)をめぐらして衆生を利益すること。善巧方便、

巧方便。おさめとつて教化するから善巧摂化(論註―証卷)という。「大聖矜哀の善巧(信卷)」、「善巧句義に於て甚深秘密の藏なり(涅槃經―信卷)」、「善巧随宜にして悪を断せしめ(法事讚)」、「種々に善巧方便しわれらが無上の信心を 發起せしめたまひけり(高僧和讃)」

『真宗新辞典』―法蔵館刊)

善巧摂化||善巧し摂化する。即ち善く種々の方法を以って、衆生をおさめ化する
こと。また、浄土論註十重義の一。『真宗辞典』―法蔵館刊)

善巧方便||よくたくみに衆生の機に相應せる種々の方法を用いて導き救うこと。

高僧和讃に「釈迦弥陀は慈悲の父母、種々に善巧方便し」等とある。方便を参照せよ。
『真宗辞典』―法蔵館刊)

摂化|| (せつけ) 摂受化益の略で、仏が全ての衆生を包容し、しかもその機類に
応じて、教化し利益すること。
『真宗辞典』―法蔵館刊)

摂化随縁|| 仏が種々の方便を以って機縁に随い、一切の衆生を摂受し化益するこ
とをいう。浄土和讃に「十方三世の無量慧、おなじく一如に乗じて
ぞ、二智圓滿道平等、摂化随縁不思議なり」等とある。
『真宗辞典』―法蔵館刊)

(2) 奢摩他|| 梵語。奢摩多とも書く。止、止息、寂静と訳す。心を一境に止めて、

妄念を息めて(やめて、とめて) 浄土に生ぜんと願すること。すなわち
禅定のこと。五念門の第三作願門はこの奢摩他を修するので、論、論
註に出づ。
『真宗辞典』―法蔵館刊)

毘婆舍那|| 又毘鉢舍那。梵語。正見、または観察と訳す。正しく、仔細に、し
かも誤りなき観察をいう。五念門の第四観察門のこと。五念門を見
よ。『真宗辞典』―法蔵館刊)

『真宗辞典』―法蔵館刊)

柔軟心|| 真理に柔順にして、背かざる心をいう。止、すなわち禅定と、観、すな
わち観察との二行が均等に並び行われることによって得られる心で、
浄土論註に「柔軟心というは、いわく広略の止観相順し、修行して
不二の心を成ず、たとえば水をもて影をとるに、清と静とあひ資け
て成就するが如し」とある。

『真宗辞典』―法蔵館刊)

広略相入|| 浄土の二十九莊嚴を広、真如法性の一法句を略とし、広と略とが相互
に通じあっていること。方便として形相にあらわれた事象とその成立
根拠である究極的真理とは不一不異の関係にある。「何故ぞ広略
相入を示現するとならば諸仏菩薩に二種の法身あり：若し広略相入
を知らざれば則ち自利利他に能はず」(論註―証卷)

『真宗新辞典』―法蔵館刊)

清と静|| 清澄と静止。ものの影が水に宿るといふのは、水が清く澄んでいても
波立っているは宿らない。だから、清く澄むことと静止しているこ
との合体があつてはじめて、影が水に宿るのである。

(仏典講座 23 『浄土論註』 327―大蔵出版刊)

(3) 仏典講座 23 『浄土論註』の解説 (早島鏡正、大谷光真著―大蔵出版刊)

解義分の第五「善巧摂化」(菩薩の巧みな手だてによる衆生救済)について、『浄土論』はこういう。

「このように、浄土の菩薩は奢摩他(止)を得て入一発句の「略」を知り、毘婆舍那(観)を得て、二十九種莊嚴の「広」を知り、もって広略相入をさとして柔軟心を獲得する」

そのうち「柔軟心」というのは、浄土に生まれた菩薩が「止」すなわち涅槃のさとりを得て、浄土の二十九種莊嚴が「清浄」という真理の一句に収まること(略という)を把握するとともに、智慧の働きである「観」によって二十九種莊嚴を一々観察すること(広という)をなして、しかもこれら略の止と広の観とがあい応じ、あい均等し、止観不二となった心を用いるのである。譬えば、水面にもの影を写す場合、清澄(「観」をさす)と静止(「止」をさす)の二つがあいたすけあつて一つになったところに、影を水に写すことができるようなものである。

また『浄土論』にいう。

「実の如く、広と略の真理のすがたを知る」と。

そのうち「実の如く……知る」というのは、実相の通りに知るということである。「広」である浄土の二十九種莊嚴も、「略」である「清浄」という真理の一句も、いずれも実相でないものはない。

また『浄土論』にいう。

「このように、巧みな手だてをめぐらして、衆生に施すこと(巧方便廻向)を完成している」

そのうち「このように(是の如く)」というのには、前に出す「広」の二十九種莊嚴にせよ、後に出す「略」の清浄という真理の一句にせよ、みな実相そのものに外ならないということである。そこで、浄土に生まれた菩薩は実相の道理をさとるから、三界の衆生が顛倒見を抱いて実相を知らず、うそ・いつわりのすがたを示していることを知る。衆生のうそ・いつわりのすがたを知るから、かれらを救わんとする真実の慈悲心を起こす。また菩薩は阿弥陀仏の真実の法身をさとるから、仏に対する真実の帰依心を起こす。

(同書 377～379ページ)

へ火捺の喩

およそ、「めぐらし施す」(廻向)ということばの意味を解釈すると、菩薩が修行して集積したあらゆる功德を全ての衆生に施して、ともどもに仏のさとりを求めて向かうことである。

「巧みな手だて」(巧方便)というのには、菩薩が自己の智慧の火で、あらゆる衆生

の煩惱の草木を焼こうとして、衆生のうち一人でも仏とならないならば、みずから仏とはなるまいと誓う。

ところが、全ての衆生が仏とならないうちに、菩薩がさきに仏となることである。これを譬えていうと、火種のつけ木を使って、摘みとった草木をすべて焼き尽くそうとして、草木がまだ焼き尽くされないうちに、つけ木のほうがさきに焼き尽くされるようなものである。

わが身を後にして、しかも衆生をすくうためにわが身がさきに仏となるから「巧みな手だて」という。そのうち「手だて」(方便)とは、あらゆる衆生を救いとして、ともどもに阿弥陀仏の安樂浄土に生まれようと願うことである。なぜならば、かの安樂浄土は、とりもなおさず、衆生が仏となる究極のさとりの道であり、この上ない手だて・方法だからである。

(同書 382 ～ 383 ページ)

(4) 幡谷明講和集6『浄土論註講義』下(法蔵館刊)より

『浄土論』および『浄土論註』において、その「柔軟心」がどのように展開していくのか。「柔軟心」のはたらきの構造を説いていくのが、第五・善巧撰化章以降です。

「善巧撰化」とは、「かくのごとき菩薩は、奢摩他・毘婆舍那、広略修行成就して、柔軟心なり」(論)とのたまえり。柔軟心とは、謂わく広略の止観、相順し修行して、不二の心を成ぜるなり。譬えば水をもって影を取るに、清と静と相資けて成就するがごとしとなり。

(東聖典²⁹²ページ *『教行信証』証巻)

・ 「不二の心を成ぜる」とは『維摩経』に説かれた入不二の法門、つまり、生死即涅槃と承知する心と領解されます。

(同書 63 ～ 64 ページ)

・ 柔軟心を成就するということは、『浄土論』では、如来の浄土に表される広略相入の意義、つまり真如のさとりそのものである一法句が清浄句となり、清浄句とは器世間清浄と衆生世間清浄、如来と浄土を真実として表されることを止観することによって、はじめて獲得されるものである、と説かれます。

さらに言いますと、広略相入とは智慧と慈悲の相即相入を意味し、大悲を契機として法性が等流してくることにほかにはありません。それゆえに、柔軟心は如来における智慧の力用である大悲心を如実に止観することによってのみ得られる、と領解されます。

大悲心を止観する、その大悲心とは、「たすけんとおぼしめしたちける」(東64ページ)、その無縁の大悲です。救いの手掛かりのまったくありえない我われを救うために、如来がたすけんとおぼしめしたちあがってくださり、そして、浄土に生まれ

よと我われによびかけ、如来の至心のすべてをかけて、名号によって我われに届け
てくださるはたらきです。大悲を契機として、如来の法性真実が我われのなかに等
流してくる、とはそういうことです。柔軟心は、如来における大悲心を止観する、
それを憶念し観察することによって得られるものなのです。
だからこそ、柔軟心は不住涅槃の心として表され、如来の大悲心がそれを止観す
る衆生のうえに菩薩の大悲心として成就するのです。そして、それは衆生の念仏行
を通してはたらくことによるのです。その根源なるものが法蔵菩薩の願心であるわ
けですから、『浄土論註』においては、さきほど申しましたような利行満足章の展
開があるわけでしょう。

(同書 65～66ページ)

信心として如来の願心に領く心、たすけんとおぼしめしたちあがつてくださった
如来の願心を、私一人がために、といただけた心が、南無のすがたです。そのいた
だいた信心は、至心に回向したまう如来の「欲生我国」の招喚の声を聞き、信順し
乗托して生きる心であり、如来の願心を我が命として生きる心です。そして、「欲生
我国」という願心のいたり届いた心は、それゆえ、おのずから「願生彼国」として
展開していきます。そのような願生心のなかで開けていくのが、往生人に与えられ
る往生浄土の人生、生死を超えて浄土にいたる人生です。

(同書 66～67ページ)

五. ここから学んだこと、課題・疑問等

○ 卷下「解義分」には①願解大意章、②起観生信章、③觀察体相章（器世間莊嚴、
衆生体）、④浄入願心章、⑤善巧撰化章、⑥障菩提門章、⑦順菩提門章、⑧名義撰体
章、⑨願事成就章、⑩利行満足章 があり、最後に短い 総結がある。

①～⑩の章の全体を通して、曇鸞大師がつぶさに明らかにしたかったことは何
か、各章の関係はどうか、この研修会を通して学びたい。

○ 山口聖典研究会出版部の『浄土論・往生論註学習ノート』には「愚禿親鸞加点了
八十四歳」として

「釈の曇鸞法師は并州汶水県の人なり。魏の末高齊の初、なお神智高遠にして三
国にあつて知聞せらる。洞かに衆経に曉らかにして独り人外に出でたり。梁国の天
子蕭王つねに北に向いて鸞菩薩と礼したてまつる。(以下略)」と記して、曇鸞大師
を讃えておられる。

「親鸞聖人がこの『浄土論註』をどのように領解されたのか、『教行信証』への引用
を含めて学びたい。

○「菩薩の巧みな手だてによる衆生救済」とは具体的にはどういうことか。

「善いことは仏様のお蔭、悪いことは自分の責任」と教えられてきた。

善導和讃（島地 11，29―192首）

「釈迦・弥陀は慈悲の父母 種々に善巧方便し

われらが無上の信心を 發起せしめたまひけり」

現実生活の上で、困難なことや障害と思われるようなことに出会っても、「これは仏様の善巧方便だから」とか、「仏様のお手だてだから」と、良い方に考えて、それを「お念仏のタネ」にして行こうとする。「転悪成徳」という言葉のニュアンスにも共通したものがあある気もする。

具体的には如来の大悲をこの身に感得し、如来の智慧（仏智）に照らされて、あるがままの現実を受け止めて生きていくということでしょうか。

○ 何者か菩薩の巧方便回向なる。菩薩の巧方便回向とは、謂わく（さきに）説ける礼拝等の五種の修行をして集むる所の一切の功德善根をもって、自身の住持の樂を求めず、一切衆生の苦を抜かんと欲うが故なり。一切衆生を撰取して、共に同じく彼の安樂仏国に生ぜんと作願するなり。是れを菩薩の巧方便回向成就と名づく。

菩薩は法蔵菩薩と言ってもいいし、諸仏・諸菩薩と言ってもいい。その菩薩は、「自身の住持の樂を求めず、一切衆生の苦を抜かんと欲うが故なり。」と願い、「一切衆生を撰取して、共に同じく彼の安樂仏国に生ぜんと作願するなり。」に大悲のお心が籠められている。

色々な角度から見た時、結局、「仏の善巧方便とは、如来廻向のこと」と考えてよい様に思いますが、それでいいでしょうか。

——以上——

●（注）今回の分担では、この「善巧撰化章」は、堤智行先生と二人で担当することになっています。二人の相談で、基礎的な「書き下し」「現代語訳」「語句の解説」等は栗栖の方で担当し、堤先生は、住岡夜晃先生の「善巧撰化章」に関する文章からの感想等の別紙送付となります。